



W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第42号

【ドーラ・シュトック】の衝撃

モーツァルトへの手紙 (その18)

会員番号 K.618 加藤 明



◇モーツァルトへの徒然なる断章

A) モーツァルトよ、小生はことし遂にあなたの生きた時間の二倍、即ち「古希」を超える高齢者の仲間入りを果たしてしまいました。あなたは『死は一つの目標です』と熱く語りながら、人一倍濃密な「いま」を生きました。35年と11ヶ月という短い命ではありましたが、その豊穡なる遺産は絶大です。あなたに驚嘆し、覚醒を強いられ、心底から救われてあなたと共に「いま」を生きてきた一介のファンに過ぎない小生が、あなたの創った音楽をナマで聴きたくて無鉄砲に拓いた《モーツァルト広場》も、ついに今年のあなたの228回目を数える命日のパーティー（12月5日の例会）で25回目の節目を迎えることになりました。

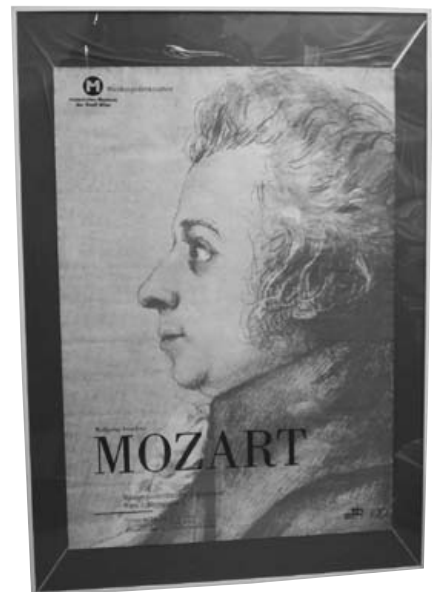
楽器とは無縁、小学校で習った音楽記号も薄憶えの音楽の素人が唯ただあなたを聴いて愉しみたい一心で、優れた演奏家の皆さんに懇願してご出演いただき、多くの会員を取り込みながらよちよち歩きで運営してきた、というのが実情です。

しかし、とてもパラドックスな話ですが、実は小生に音楽的な造詣が希薄だったことや地域

の演奏家の事情などとは無縁の存在だったことが幸いして、今日までやって来られたとも言えるようです。

人は欲しいものは他人から手に入れるしかありません。「モーツァルトをナマで聴きたい」という小生の切なる願いを受け容れて下さった心優しい演奏家の皆さんに、ここで改めて感謝を申し述べたいと思います。

B) モーツァルトよ、短くも豊穡なあなたの人生が終焉して228回目の命日を迎える今日に至っても、あなたへの篤い思いを引きずり、あなたを内なる鏡として生き続けている人々は後を絶ちません。もちろん、我が《モーツァルト広場》の会員のなかにもあなたへのオマージュを大切にしている方が



たくさんおいでです。

今年の夏に【ドーラ・シュトック モーツァルトを描いた女流画家】を上梓した松田至弘さん(会員番号K,203)もこうしたあなたの熱烈なる信奉者のお一人です。

元来、西洋史の泰斗として教育界でも広く知られた松田さんが、このたび出版された【ドーラ・シュトック】は、前回の【モーツァルト時代の寵児への旅】を伏線として書かれており、衝撃的で新たな知見に満ちたファン必読の好著です。

このご本が世に出る前まで、あなたの生前最後の肖像画を描いた女流画家はドーリス・シュトックでした！ 松田さんはこのよく知られたこの「横顔のモーツァルト」に強い関心をお持ちになり、自ら画家があなたと出逢ったドレスデンに探検の旅をされました(奥様も助手としてご同行の由)。そして、画家の知られざる様々な秘密を丁寧に暴き出すというスリリングな作業を敢行するなかで、ドーリスが実はドーラ・シュトックであることも自然に発覚されることになったわけです(小生の持っている文献でも、ドーリスという名がほとんどで、わずかに属啓成が1980年に著した【横顔のモーツァルト】にドーラ(ドロテア)・シュトックという記述があるのみ)。

ご存知の方も多いのですが、年二回の《モーツァルト広場》のコンサートとアニバーサリーパーティー(例会)では、第3回以降ステージサイドに慣例として必ずこのドーラが描いた「横顔のモーツァルト」のB全判サイズのシンボルポスターが鎮座しています。このポスターは小生が1997年2月にウィーンの通称「フィガロハウス」で見つけ出し、胸を高鳴らせて買い求めたものです。まさか、あの特大ポスターの原画のサイズが普段私たちが使っている官製ハ

ガキよりもずっと小さいサイズであることなぞ知る由もなく・・・。

松田さんはこの【ドーラ・シュトック】刊行まで6年もの歳月が費やされているのですが、モーツァルトと同時代を生きた市井の女流画家の息遣いが全編に感じられ、当時の芸術家の実相が見事に浮き彫りとなっているところに驚きと感動を禁じ得ませんでした。そして、改めて当会員の松田至弘さんという稀有なモーツァルティアンの叡智と情熱を誇りに思い、惜しみない拍手を贈ったのでした。

※小生が「フィガロハウス」から持ち帰った件のポスターは帰国後ただちに当広場会員の斎藤比奈子(k,78)さんの工房にて表装作業が施され、今日も使われているものです。



C) モーツァルトよ、小生は毎日のように往復70キロの道のりを車で通勤しているのですが、最近になって車の運転上で奇妙な習慣にはまってしまったお話をしましょう。これは「モーツァルト病」というよりは「ケッヒェル病」と言った方が的を射た奇病(!)、大げさに言えば「ながら運転」(!)にまつわる話です(ですから、絶対真似はしないでください!)

以前小生の車の登録番号が「アヴェ・ヴェルム・コルプス」に付けられているケッヒェル番号の618であることはお話したことがあります(もちろんK,618は小生の「広場」の登録番号でもあります)。ケッヒェル番号(以下K,と表記)という便利な仕掛けが小生に、愛車にも「アヴェ・ヴェルム・コルプス」を被せるという奇妙な遊び心を刺激したわけです。

至極当然な成り行きですが、こうしたこだわりを持ち続けることで、日常的に車道で行き交う様々な車両番号にも特異な関心が生まれました。例えば、K,626の「レクイエム」、K,525は「ア

イネ・クライネ」だし、K,361が「グランパルティータ」といった具合に、それぞれの車両番号を不意に発見することで、その曲の旋律が浮かび、とてもエキサイティングな感覚を呼び戻されるのです。

この特異な遊びにはまったら最後、なかなか抜け出すことはできません。告白すると、小生のこうした「ケッヒェル遊び」は過去10年に及ぶのですから、その深刻な罹患状態はご理解いただけると思います（あなたのあざけり顔が浮かびます）。

さて、こうした日常で先日勃発した、ある「奇異な事件」をご紹介します。

「広場」の幹事である佐藤滋さんが名物コラム「酒とモツの日々」（第41号）のなかで、あなたに会ったら「失神するでしょう」とうがったジョークを飛ばしていましたが、小生もこの奇異な出来事に出くわし、もしかしたら「失神しちゃうかも・・・」という危惧感を強く懐いた事件がありました。

それは過日、ラデク・デボラークという希代のホルン奏者のホルン協奏曲集を買い求めたことに起因しております。そのあまりに素晴らしい演奏に虜になり、小生は毎日のようにそのCDを聴きながら車を走らせておりました。ホルン協奏曲は全部で4曲（順番にK,412 417 447 495）ありますが、何度も聞いているうちに行き交う車両番号の412とか417といった数字が妙に気になり眼球に飛び込んで来るようになりました。

そうしたある日、秋晴れの爽やかな朝でした。驚くべきことが起こりました。国道を職場に向けて北上中の対向車線上に、先ず第1番の412がヒョイと出現し、ついで第2番417、そしてまさかの第3番447という具合に何と次々に

目の前をホルン協奏曲が通り過ぎたのです！
ああ、何としたことだ、これで次に第4番の495が襲い掛かってきたら「俺は失神するかもしれない！」、その時、正にあの佐藤滋さんの失神のジョークが急に思い起こされたわけです。

わずか30分足らずで1番から3番まで順に目に留まった恐るべき偶然を小生は天国から悪戯したあなたの仕業かと疑ったほどでした。そして、待ちました、

495のプレートを載せた車両の出現を・・・
しかし、ああ、残念というか幸いにも言おうか、その日はついに495には遭遇できなかったのです。つまり、「魔の失神の誘惑」から解放されたのでした。

しかし、どうしても495へのこだわりを捨てきれない小生の「ケッヒェル病」が容易に癒えることはありませんでした。くだんのホルン協奏曲4番495の車両番号がようやく目の前に現れたのは、失神直前までのぼり詰めたあの日から実に2週間後のことだったのです。

495という番号は欠番なのか！？とすら思い込んでいたその日、臨海道路で夕日を浴びて颯爽たる風格を醸しながら眼前を横切ったシルバーのセダンのプレートに目を疑いました。

「アッ！！」なんと、正にあの幻の495だったのです。

その時、ようやくこのケッヒェル遊びの一幕が閉じられたような、異様な安堵感が小生を包んだのです。同時に、こんな偏執的な小生を遠くから見下ろすモーツァルト、あの糞尿譚好きのあなたの悪戯っぽい表情が浮かんで来たのでした。

「キミハ、ナニヲヤツテルノ・・・？」という甲高い声とともに。

end

『ドーラ・シュトック モーツァルトを描いた女流画家』の出版 —肖像画はいつ、どこで描かれたか—

会員番号 K.203 松田至弘

「モーツァルト広場」のコンサートでは、額に入ったモーツァルトの大きな肖像ポスターが会場のホールの前面に掲げられ、音楽会の雰囲気盛り上げている。

この肖像ポスターは、ドイツの女流画家ドーラ・シュトック（1760～1832）が、1789年にドレスデンで描いた一枚の真正な細密肖像画（7.6×6.2cm）をもとに作られている。

私はこの肖像原画を描いたドーラ・シュトックに関心を持ち、約6年間にわたってその生涯と画業について研究を続けてきたが、悪戦苦闘の末、この度何とか一書にまとめあげることができた。



出版した
拙著（三
元社刊）

『ドーラ・シュトック モーツァルトを描いた女流画家』がそれで、東京の三元社（文京区本郷）から刊行され、全国の主な書店やインター

ネット上の「アマゾン」などの各通販サイトで販売されている。（四六判・上製カバー装、口絵・カラー版16ページ、全頁数・160ページ）

ドーラ・シュトックはいつ、どこで、モーツァルトの肖像画を描いたのか。それが可能となった理由としてどういうことが考えられるか。

ここでは、本著作で示した見解を紹介してみることにはしたい。

*

ドーラ・シュトックが、銀筆と黒チョークを使って制作したモーツァルトの横顔の肖像は、真正な肖像画とされている。

真正な肖像画とは、いつわりのない本物の正しい肖像画ということである。それは作者が、



モーツァルトの横顔の肖像

ある特定の人物の姿を実際に自分の目で見て描きだした肖像画ということになる。従って、ドーラ・シュトックがモーツァルトの真正な肖像画を描くためには、その前提としてモーツァルト

とどこかで出会っていなければならないことになる。

ここでドーラ・シュトックの歩みについて簡単にふれてみると、彼女は職人と芸術の町ニュルンベルクで1760年に生まれている。

5歳のとき、父のヨハン・ミハエル・シュトックが、ブライトコプフ出版社と契約して、書物に挿入する装飾模様や挿絵を制作する銅板彫刻師として働くことになったので、一家は会社のあるライプツィヒへと移住した。

ドーラ・シュトックはそこで、父から絵の描き方や彫版の技術を学んだ。そして、画家となるためにライプツィヒ美術アカデミーで本格的訓練を積んだ後、1785年にザクセン王国の首都ドレスデンに移り、肖像画家として活躍した。ドレスデンは芸術と文化の都とも言われていた。

この地でドーラ・シュトックは、ドレスデン上級宗教局の評議員クリスティアン・ゴットフリート・ケルナー（1756～1831）の家族と一緒に生活した。ケルナーは町の名士であり、妻のミンナはドーラ・シュトックの妹であった。

ケルナー家の住居は、新市街地のコールマルクト14にあり、さらに東へ遠く離れた景勝地ロシュヴィッツにもぶどう園つきの家屋と東屋を所有していた。

*

一方、モーツァルトは、皇帝ヨーゼフ2世単独統治下の啓蒙都市ウィーンに定住して活躍し、“時代の寵児”になったが、1788年後半から90年にかけて演奏会数が激減し、音楽活動上でも生活上でも危機的状況に陥った。

その行き詰まりを打開しようとして実施されたのが、北ドイツへの演奏旅行である。モーツァルトは、プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム2世を訪ねるため、1789年4月8日、カー

ル・リヒノフスキー侯爵とともにベルリンへ向けて出発した。

途中プラハを経てドレスデンに立ち寄ったのは、4月12日の夕方から18日に次の訪問地ライプツィヒへ出発するまでの間とされている。

モーツァルト一行のドレスデンでの宿泊先は、“オテル・ド・ポローニュ”という名の高級ホテルであり、宮殿通り7に位置していた。

モーツァルトは、ウィーンに残してきた妻のコンスタンツェへ4月13日と16日に手紙を書き、誰と何処で何をしたかまで事細かに報告している。

この手紙を分析してみると、4月12日（日）、13日（月）、14日（火）、15日（水）の様子が具体的にわかるが、残念ながら、ケルナー家を訪問してドーラ・シュトックに会ったという記述はどこにも見当たらない。

*

ドーラ・シュトックとモーツァルトを結びつける史料はないだろうか。私は長い間、あちこちさがしていた。そして、やっと見つけて手に入れることができた。

芸術文化史の研究者で著述家のグスタフ・パルタイ（1798～1872）が1871年に、『若き日の思い出』（独文、ベルリン）という著書を出版していて、その復刻版が出ていたのである。

パルタイはこの著書のなかで、ドーラ・シュトックから聞いた話をもとにして、モーツァルトのケルナー家訪問の様子について次のように記している。

「モーツァルト自身は、短いドレスデン滞在中に、ほとんど毎日ケルナー家を訪れた。魅力的で才気あふれるドーラに、彼は南ドイツ的快活さで機嫌よく無邪気にあいさつした。彼は大抵、夕食のちょっと前に現れ、堂々とした言葉

づかいでとうとうと話した後、クラヴィーア(筆者=現在のピアノの前身)の前に座り、即興演奏を続けた。隣の部屋で食卓が整えられ、スープが皿に盛られると、召使は食事の準備ができたことを知らせた。しかし、モーツァルトは即興演奏に夢中になっており、どうしてそれを止めさせることができたのだろうか!スープは冷めてしまい肉も焼けたが、巨匠には今自分がしていることやちよっと休息しようという意識がなく、完全に没頭していた。それで、私たちは、楽器で魔術的に呼びだされたすばらしい魔法の音を聴き続けた。」

*

ドーラ・シュトックはいつ、モーツァルトと出会いその横顔をスケッチしたのであろうか。

パルタイは、モーツァルトが短期間のドレスデン滞在中に「ほとんど毎日ケルナー家を訪れた」と記しているが、前述したようにモーツァルトの手紙には、ケルナー家訪問について一切言及されていない。

手紙に書かれていることを順に整理してみると、モーツァルトは4月12日から15日まで大変多忙な時を過ごしており、これらの日だと、ケルナー家を訪問するには無理があるように思われる。また、4月18日は出発の日であり、訪問することは不可能であっただろう。

ところで、手紙や記録はすべて正しく書かれているとは限らない。いろいろの動機から作り上げられた虚偽が、そのなかに混入されている場合もある。それ故、歴史学的には静かに史料を吟味し、批判する態度が常に求められる。

そんな訳で私は、パルタイの文章について、どうしても懐疑的にならざるをえなかった。ドーラ・シュトックはパルタイに、モーツァルトのケルナー家訪問の回数とモーツァルトとの

関係の親密さを大げさに誇張して話したのではないだろうか。それをパルタイは、鵜呑みにして記述してしまったと考えるのが、筋のようになっていない。

このように考えると、モーツァルトがケルナー家を訪れドーラ・シュトックと出会ったのは、4月16日か17日、あるいはその両日ということになろう。

画家であるドーラ・シュトックが、有名な天才作曲家の風貌をすばやく素描したのは、当然すぎることであったろう。

*

次に、モーツァルトが訪れたケルナー家の住居であるが、コールマルクトの住居とロシュヴィッツの住居のどちらであろうか。

これについては、私がかつて購入した観光案内書の『ドレスデン—エルベ川の歴史都市』(独文)に、次のように記されていた。

「有名な一族たちは、(ロシュヴィッツの)ぶどう山に次々と家を建てさせた。シラーも一時、ここで活動した。彼は1785年から87年にかけてこの住居と東屋を使い、『ドン・カルロス』の一部と「歓喜に寄せて」を書いた。クライスト、フンボルト兄弟、そして、モーツァルトやシュレーゲルのような有名な人々が来客としてここにやって来た。」

このように、モーツァルトが訪れたのは、ケルナー家のロシュヴィッツにある住居の方とされてきたのである。そして私は、これはおかしいのではないかという思いに駆られた。

と言うのもロシュヴィッツは、市街地から相当離れたところに位置しており、パルタイが記しているように「夕食のちょっと前に」たやすく訪れるというようなことは、当時の交通事情ではとても考えられないからである。

モーツァルトは、宮殿通り7の広いブリュエーダーガッセにあったオテル・ド・ポローニュに宿泊していたのであり、そこからだとコールマルクト14の住居へは、アウグストゥス橋を渡ってすぐに訪れることができた。



コールマルクトのケルナーハウス

推測であるが、モーツァルトをケルナー家へ

と導いたのは、宮廷教会の作曲家でドレスデンの首席楽長であったヨハン・ゴットリープ・ナウマン（1741～1801）ではないかと思われる。

ナウマンは、モーツァルトの手紙のなかに数回登場するが、彼はケルナーの文化サロンの親しい友であった。そして、ケルナー自身も音楽に造詣が深く、モーツァルトの歌を口ずさむほどのファンだったのである。

以上のように私は、モーツァルトが訪れた住居は、コールマルクトの住居の方と断定した。

そこにケルナー家とドーラ・シュトックは1785年から93年まで住み、後年ベルリンへ移住するまでの間に二回転居している。

コールマルクトの建物は、1875年にケルナー博物館となり、その後1945年のドレスデン空襲で破壊された。

入会のごあいさつを兼ねて

会員番号 K.427 吉田 博

モーツァルト広場との出会いについては機会を改めてお話しするとして、昨年のプラハ歌劇場「フィガロの結婚」を聴く機会に恵まれ、数年ぶりとなる魂の底から震えるほどの感銘を受けた。序曲の木管から入って弦が一斉に鳴り響いたあたりからもう涙、という状態でラストのバリトンソロに至るまで文字通りメロメロの状態で大満足であった。座席は3階席ではあったが最前列でとても響きが良く、両隣が若く美しい女性に挟まれ緊張を強いられるかと思いきや、その状況を全く忘れさせプラハという街には行ったことがないけれども長く奥深い音楽の

歴史に思いを至らせることができ、今度オーストリアに行くことができなかったときには合わせて行ってみたいと強く思った。

歌謡曲・ロック・ポップスなどの音楽業界の凋落については、やはりマスメディアや不特定多数相手の大量生産的な価値観の崩壊とともに考えなければならない必然かもしれないけれども、とにかく昨今の世にはびこる音楽で心が震えるほどの感動を得る機会が少なくなり（自分の耳が肥えたことを考えに入れたとしても）、その前がいつだったかと思ったとき、まだ大阪にいたときにスウェーデン王立男声合唱団「オ

「オルフェイ・ドレンガー」をザ・シンフォニーホールに聴きに行った時であったことを思い出した。

クラシックファンでも合唱好きの方はあまりいないかもしれないけれども、私は大学に入るまではフォークやロックなどのバンド活動ばかりでクラシックなどほとんど聴いたことがなかったのに、大学の入学式で男声合唱団が学生歌の歌唱指導に登場してその強く時には甘く切ない響きに魅せられ入団し、結局6年間在籍してプロの作曲家・指揮者のもとにクラシックをはじめとする音楽への知識・教養を深めたといえる。

オルフェイ・ドレンガーに話を戻して、彼らはステージに100人ほど男ばかりがずらっと並ぶのだけれども、もう並んだ状態で思わずウルッと来てしまうほど、そのたたずまいから「これはものすごいものを聴かせてくれる」と確信でき、しかもその期待に十二分に応えてくれる本当にすごい集団だ。その彼らの音楽に酔いしれる感涙のひとつが数年前の最後で、次が今回の盛岡でのフィガロである。

ちなみに私はオペラファンではない。ただ、モーツァルトのフィガロだけが大好きなのであ

る。合唱も社会人になってからは疎遠となり、そういえば昔から団体活動が苦手な学校でも職場でも「ムラ」的な予定調和・なれ合いが嫌い、わずか数人でやるバンドでさえ自らの演奏の稚拙さを棚に上げて他人の下手さが我慢にならず、結局は一人で何もかもこなすギター弾き語りという、子供のころに初めて音楽に携わった時の原点に戻ったのがここ数年のことである。

それにしても、盛岡に移住して2年にもならないのに、大好きなフィガロを一流の歌劇場メンバーの演奏で聴くことができたことはとてもラッキーなことだと思う。もっと遡って言えば、私が小学校の頃に学校の体育館で「サウンド・オブ・ミュージック」を見てオーストリア・チロルの風景にあこがれたことが私にとっての音楽との出会いだったのかもしれない、そのオーストリアと国境を接するチェコスロバキアの一流のモーツァルトを聴く機会が盛岡で得られたことは何かの縁としか思えない。

これからもモーツァルトの音楽を聴き、彼の音楽を愛し、人生を少しでも豊かな心で過ごしていきたいと思う。

酒とモツの日々 (42)

会員番号 K.488 佐藤 滋

2019年は新しい時代の始まりとして歴史に刻まれました。「令和」が平和な日々となること

を祈って止みません。

ところで酒好きの音楽ファンには、ちょうど

百年前の1919年も忘れてはならない大事な始まりの年です。この年アメリカでは禁酒法が制定されました。ニューオリンズ港の接収により、居場所を失った南部の黒人たちによる即興演奏の文化がシカゴの隠れ酒場に表現の場を移します。これがジャズ芸術の黎明となりました。

当時のジャズ（ディキシー）の凄いところは、調性に染み付いた感情の衣を裏返してみせたことにあります。例えば賛美歌「主よ御許に近づかん」（タイタニックが沈没する時、楽師が最後に演奏した曲）を白人社会では、「悲しまないで下さい。私は主の御前に行くのですから・・・」ですが、黒人のジャズでは「喜んでくれ。俺はやっと神様の御前に行けるんだ！」となります。衣は真逆ですが、その下にある人間の哀しみは共通です。それが大切なポイントなのでしょう。感情（フィーリング）のこもらない単なる即興では音楽の歴史には成り得なかったと思います。

音楽に喜怒哀楽の感情を刻み込んだのはベートーヴェンでした。（来年生誕250年！）その後、ロマン派以降の作曲家やポップスによって音楽は豊かな地平を切り開いてゆき、ついには憎しみや思慕、恭順と葛藤、愛と死、憂愁や洒脱、そしてナショナリズムと革命までをも曲の中に取り込んで行きます。（ちなみに第二次世界大戦後、クラシックは現代音楽へ、ジャズはフリージャズ等へと変貌し、こびりついた感情の衣そのものを脱ぎ捨てて行きます。泣きながら笑う、笑いながら泣く、という究極の表現さえ超えて、ひたすら音の超克に自己を投影する演奏スタイ

ルは、ある意味、現世に背を向けた天才達が解放を求めた末にたどりついた表現なのかもしれません。そこに聴衆の存在は薄れていったとしても・・・)

さて、ベートーヴェンの先駆けとなったのはモーツァルトですが、その作風は剥き出しの感情表現ではなく、むしろ日常の喜怒哀楽とは距離を置くものでした。控えめの、感情の表出を恥じらうかのような奥ゆかしさがあり、だから彼の短調には涙よりも、むしろ諦念の微笑といったものが似合うのかもしれませんが。明るい曲に一瞬影が差したり、暗い色彩に何度も陽が差し込むところが、モーツァルトファンにとってはたまらない魅力のひとつです。長調と短調は、モーツァルトによって音楽を豊かに彩り、そしてジャズによって新たな意味を与えられました。

ジョージ・ルイスという黒人クラリネット奏者が吹く「世界は日の出を待っている」の古い録音（名演！）ほど涙の似合う明るい長調の音楽は無いと思っています。また、モーツァルトほど笑顔の似合う寂しい短調の音楽を作った人もいませんでした。

泣きながら解放の夜明けを待つ黒人奴隷と、微笑を絶やさずにレクイエム半ばで筆を折った早逝の作曲家。その姿に共通するものはなくても、その魂に映っていたのは人生への純粹無垢な憧れだったのでしょう。

先人が音楽に刻み込んだ涙と笑い、そして憧れを胸に、新しい時代に乾杯したいと思います。

♪うれしいお知らせ♪

会員の^{こまごめ}駒込^{りょう}綾さん（会員番号K.207）がこの度はじめてのCDアルバム「しあわせのカタチ」をリリースしました。

くわしくは、ホームページをご覧ください。

URL <http://www.ryoviolin.com>



定価 2,000円（税込）

お問い合わせ…駒込 携帯電話 090(4315)4274

事務局より

2019年はラグビーワールドカップが盛り上がったのが記憶に新しいですが皆様にとってはどのような1年でしたでしょうか。令和になった本年、私事ですが我が子4人中2名が受験生となかなか落ち着かない年末を過ごすことになりそうです。育児は期間限定、でも子育ては終わることはないとはよく言った

もので先輩方のお話は全てが参考になり、その歳になってわかることがまだまだたくさんあります。来年は東京オリンピックイヤー。またスポーツが盛り上がる1年になるでしょうか。皆様にも素敵な1年になりますよう祈念しております。(K575)

「モーツァルト広場」ではいつでも会員を募っております(R元年12月現在90名) [モーツァルト広場](#)

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000（諸会費、別途）ご紹介下されば幸いです。

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058
又は 本田（事務局）080(1673)8322